

授業料不徴収協定に基づく派遣交換留学 終了報告書

所属(本学)	工学院 機械系 エンジニアリングデザインコース		
現在の学年	修士 2 年		
留学先国	フィンランド	留学先大学	アールト大学
留学期間	2016 年 9 月 11 日～2017 年 6 月 10 日 (2016 年 9 月～12 月/私費留学: イギリスのロイヤル・カレッジ・オブ・アート(RCA))		

① 留学先大学(機関)の概略

[イギリス]

ロイヤル・カレッジ・オブ・アート(RCA)は、イギリスのロンドンにある国立の美術大学。修士号(M.A., M.Phil.)と博士号(Ph.D.)を授与する美術系大学院大学としては世界で唯一の学校である。QS 世界大学ランキングは 2015 年に初めてアート・デザイン分野の格付けを行ったが、そこで RCA は世界 1 位に選ばれた。

[フィンランド]

アールト大学はイノベーションの促進を目指す新しい大学として 2010 年に新設された。アールト大学の前身は、ヘルシンキ工科大学、ヘルシンキ経済大学、ヘルシンキ芸術デザイン大学の有名3大学であり、フィンランドが生んだ世界的に有名な建築家兼デザイナーにちなんで名づけられた。技術とビジネスとデザインという、異なる分野の組み合わせがもたらす可能性を追求するため統合された。大学側は、学際的な環境が学生にとって斬新かつ生産的なアイデアを生む土壌になることを期待している。

② 留学前の準備

卒業は当初から一年遅らせる予定であったので、留学前には就職活動は行わず、当時取り組んでいたプロジェクトや授業の履修に集中した。イギリスでの研究活動に関しては、それまでやっていた修士の研究とは異なる内容であったため、主に渡航してから現地の先生方とのミーティングを通して計画を立てて行く感じであった。RCA の先生方とは、すでに渡航前にスカイプや東工大で顔合わせをしていたため、比較的スムーズに進めることが可能であった。

一時帰国せずにイギリスからフィンランドへ直接渡航する計画であったため、留学前はイギリスだけでなく、フィンランドへの入国に必要なものの準備をある程度まとめて行なう必要があった。イギリスは6か月未満の visiting researcher の場合はビザは必要ないが、受け入れ先の承諾書や奨学金受給証明など入国審査の際にいくつかの書類を見せる必要があるため、英国政府のホームページを念入りに調べて用意した。フィンランドに関しても同様であるが、こちらはアールト大への受け入れ決定後、大学側から渡航等に関する案内が来るので比較的やりやすかった。英国にあるフィンランド大使館で、滞在許可の申請等の手続きを行なった。

ロンドンで生活する上で最も苦労したのは、住居探しであった。RCA 側からは寮は一切提供されないため、自分で家を探す必要があった。ロンドンは家賃が高額な上、空いている物件の数に対し部屋を探している人の数が多いため倍率が高く、物件を見に行った後すぐに決定しなければならない場合が多い。そのため、日本であらかじめ住みたい地域の見当をつけた上で、渡英後の最初の一週間ほどはホテルに滞在しながら、現地で家探しを行なった。フィンランドに関しては、ヘルシンキ周辺地域に住む学生へ住居を提供する財団(HOAS)またはアールト大学生協の AYY のいずれかの寮に入る場合が多く、大学から案内が送られる。こちらでも倍率が高いらしく、早めに希望を送って決める必要がある。キャンパスに近い住居でのオファーが来たら、多少自分の細かい希望条件に沿わなくても、できるだけ受け入れることを強くおすすめしたい。

留学に必要な TOEFL 等の点数はすでに持っていたため、英語に関する準備は特に行わなかった。フィンランドでは英語が話せれば授業や生活には問題ないので、事前のフィンランド語の学習等は全く必要ない。ただし、街中で使える簡単な挨拶や、空港から大学への電車やバスの駅の名前、行き方等は予習しておく価値はあると思う(フィンランド語、スウェーデン語表記はあっても英語表記が無いことが多いため、初見時は慣れなくて結構混乱する)。

③ 留学中の勉学・研究

[イギリス]

東工大とRCAだけでなく、フランスの大学も合わせた3カ国の大学の共同研究に携わった。学生ではなく研究員として訪問していたため、大学の授業は履修することができなかった。RCA のデザインの学生を対象者として、創造性の向上に関する様々なワークショップを開発して実験し、分析した。現地では RCA の教授の指導の下、パリから定期的に来ていたポスドクの研究員とともにフィールドワークを行ない、各国にいる先生方とオンラインで情報を共有していくスタイルを取った。東工大の研究室の指導教員とは週 1 回ほどのペースで、スカイプで連絡を取っていた。プロジェクト終了後、8 人で論文を執筆して学会に提出した。

[フィンランド]

こちらでは授業の履修がメインであり、ロンドンでの研究の続きの内容以外は研究活動はほぼ行なっていなかった。デザインや設計工学関連の機械系の授業をメインで受講したが、自分の専門分野とは直接関係ない分野の短期集中サマースクールへの参加や、特別講演の聴講を通して視野を広めたりもした。東工大の研究室の指導教員とは月 1 回ほどのペースで、スカイプでミーティングを行なった。

(受講して単位を取得した主な授業) (ECTS:ヨーロッパ単位互換制度)

System Engineering Design L (5ECTS)

Advanced Manufacturing L (5ECTS)

Interdisciplinary Product Development (5ECTS)

Survival Finnish for Exchange Students (1ECTS)

Aalto BIM Digital Design and Construction Summer School 2017 (3ECTS)

④ 留学中に行った勉学・研究以外の活動

EU 圏に拠点を持つ大学生の団体である Erasmus Student Network の企画の一環でフィンランドの最北の地、ラップランドに旅行し、オーロラを観たり、犬ぞりやスノーモビル、スキーを楽しんだりした。ノルウェーまでバスで行き、サウナに入った後に北極海で泳ぐなど、日本では絶対にできないようなエクストリームな体験をすることもできた。大学内には会員制の大きなスポーツセンターがあり、トレーニングだけでなく、バレーボール、卓球、バドミントン、フロアボールといったスポーツを楽しんだ。その他、Facebook で見つけたヘルシンキでのイベントや祭典等にたまに参加しに行った。

フィンランドは北欧諸国を除いて他のヨーロッパ諸国から地理的に少し離れているが、それでも休みの日を利用して気軽に他国へ旅行することができた。同じ奨学金のプログラム(トビタテ！留学 JAPAN)で知り合った友達にも旅行先で会い、話を通して情報や価値観などを共有することができた。

⑤ 留学を終えて、自分自身の成長を実感したエピソード

専門分野に関しては、デザイン系のトップと言われる2つの大学でそれぞれの方法論を見ることができたのは非常に貴重であった。デザインに携わるたくさんの有能な方とのお話を通じて、自分の今までの視野がいかに狭かったかを改めて痛感した。また、たとえ自分の専門外の内容であっても、今世界で起こりつつある変革に関連する話題が共通して取り上げられていたのは興味深かった。これからの時代の中で求められるマインドセットやスキルセットについてより深く考えさせられる良いきっかけとなった。

留学中の勉強以外のことに関しては、ロンドンでの家探しやイギリスでのフィンランドに向けた準備、スマートフォンの盗難、極寒や特殊な日照時間の中での生活など、不安やストレスを感じるようなことがしばしばあった。ただ、これらを一つ一つ乗り越えることで、多少うまくいかないことや不便なことがあっても、大抵の場合はなんとかなるということを学ばされた。便利で物に恵まれた東京で生活していた自分にとって、生きていく上で本当に大切なものは何かということを見つめ直すようになれたことは、留学を通して成長できたことだと思いたい。

実は自分はずっと幼少期に海外に住んでいた経験があったが、今回の留学を通して改めて海外に住むことの大変さと楽しさを実感できたと言える。

⑥ 留学費用

返済不要の奨学金「トビタテ！留学 JAPAN」から、月 16 万円の生活費に加え、渡航費分 20 万円を頂いていた。保険は大学指定のものに入っていた（東京海上日動）。

⑦ 留学先での住居

[イギリス]

初めの 1 週間ほどは大学のすぐ近くにあるホテルに宿泊していたが、その後は、大学から地下鉄と徒歩で計 45 分ほどのところにある西ロンドンの一軒家の一室に住んでいた。大家の家族と同居していたが、ホームステイという形ではなく、自炊していた。Spareroom という現地のサイトを使って探した。

[フィンランド]

大学のメインビルディングから徒歩 12 分ほどの距離にある、HOAS の寮に住んでいた。スペイン人とベルギー人のルームメイトを含めた計 3 人でトイレ・シャワー・キッチンを共有して生活していた。首都ヘルシンキからはバスで 25 分ほどかけて行ける距離にあった。キャンパスのある Otaniemi には驚くほど店がないので、食料品や生活に必要なものはほとんどヘルシンキに行って買っていた。

⑧ 留学先での語学状況

イギリスでの生活には日常会話程度の英語でも問題ないが、家を探す際など粘り強く交渉しないと不利になってしまう場面もあるため、自分の意見をきちんと主張できるくらいに話せておいた方が良い。もっとも、授業や研究活動においてはかなり高いレベルで議論できることが求められると思うので、リスニングやスピーキングを通してインプットとアウトプットを鍛えておくことは必須と言える。

フィンランド（特にヘルシンキ）では大多数の人が英語を話せるので、フィンランド語を学ぶ必要は特にないが、やはり簡単な挨拶などは現地語でできると印象が良くなるので多少は覚えておくと便利かも。また、スーパーの食品の表示などは基本的にフィンランド語またはスウェーデン語であるが、いつも買うような物の名前は自然と覚えていくので心配は要らない。フィンランド人はシャイで気難しい印象のある国民性を持つ、とも言われるが、話しかけてみると実はフレンドリーで優しい人々なので、困ったときは積極的に話しかけてみるべき。アールト大学は、様々な国から来ている留学生がいるので英語のレベルは一概には言えないが、グループワークや議論を伴う授業が比較的多いので、チームメンバーと協調して行ける程度の最低限の英語力はあった方が良い。

⑨ 単位認定(互換)、在学期間

留学中に取得した単位の互換に関しては手続き中であるが、あまりスムーズに進んでいない。派遣交換留学の協定校で受講して正式に取得した単位あるはずなのに、認定承認のための度重なる専攻会議や大量の関連書類の提出のために時間を不必要に費やさなければならないのは非常に遺憾であり、今後留学する人のためにも大学側が根本的なシステムの見直しを検討する必要があると感じた。在学期間は半年ないしは一年延長する予定である。

⑩ 就職活動

在学期間の延長は初めから想定していたため、留学先での本格的な就職活動は特に行わなかった。ただし、業界研究のために日本の企業でのサマーインターンシップには参加したいと思っていたため、特に締め切り日が帰国直後のものについては、留学先でリサーチ、エントリーシート作成・応募を行ったりした。

⑪ 留学先で困ったこと(もしあれば)

東工大の留学関連の事務を介さない研究留学に関しては、住居探し、受け入れ先とのやり取り、visaに関する調査等すべて自分で行なう必要があったため、それなりに大変であった。また、北欧の国の冬は気温が -25°C 近くまで下がることもある上に、日照時間が非常に短いため、環境に適応するのに時間がかかりストレスが溜まることもあった。冬にこのような地域に留学する予定のある方は、体調を崩さないように、十分な寒さ対策(特に雪靴、帽子、インナーウェアは重要)をした上でバランスの取れた食事やビタミンDの補給を心がけると良い。

⑫ 留学を希望する後輩へアドバイス

留学を通して得られるものは色々あるが、その一つとして、物事を多面的に見ることができるようになることがあげられる。異国に住み、外国の視点に立って日本を見るということは滅多にできないことであるし、どんな形であれ必ず視野を広めることができるので、きっかけは何であれ留学に行くことの価値は大きいと思う。もし留学中に外国人とお互いの国の違いについて話す機会があれば、是非日本の良いところだけでなく、良くないところなどにも目を向けてあれこれ考察し、議論してみることをおすすめする。

また留学を通して得られる仲間やコネクションは非常に貴重である。勉強だけでなく、旅行やイベント、ちょっとした食事会への参加などに時間を割くことは、後々人脈の形成や新たな自分の発見などにつながることもあるので、是非大切にしてもらいたい。